螺子巻パラドックス

湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
螺子巻パラドックス

【Ｎコード】
Ｎ１２０８Ａ

【作者名】
湊

【あらすじ】
斐川尚之。大学を卒業した彼は、憧れだった《華の都・ＴＯＫＹＯ》へ降り立った。そこで彼を待つ、隣人達の恐怖も知らずに……。
（ホラーではありません）

Are you ready?

…ーこれは、東京の隅っこにある、とあるアパートのお話ー…

☆☆☆start!!!

『東京駅〜東京駅〜お降りの際は…』

《プシュ〜》
ゆっくりと開く新幹線のドア。
そこから、自分の人生の新たな第一歩を踏み出そうとする俺。
ラッシュアワーの人混み程度じゃ、俺のこのはやる気持ちは抑えられない。

…ついに、ついに俺は降り立ったんだ。
そう、これはまさに人類が初めて月の地面を踏みしめたような充実感。
なんともいえない期待感。嬉しいと不安を降り混ぜて造る、雄大なカルテット…。

いや、きっとこの喜びはどんな詞でもあらわせれないだろう。
だってこれは、俺が長年想い続けてきた【夢】なのだから。
思えばどのくらいたったのだろう…。故郷を出ると決めて早１８年。
長かった…辛かった…。
でもそんな苦労ともこれでおさらばだ！この第一歩が俺の新たな人生の（二回目）スターァットラッイーンになるんだ！！

そして俺は、進展地の土、正しくはコンクリートを踏んだ。

「来たぜ！華の都☆東★京☆！」

この想いが、後々１８０度変わることを、この時の俺は知らない…。

Let's goooo!!!!

さぁ、出かけよう♪
想いでの溢れる道を駆け抜け～♪
さぁ…フーフフフフーン♪

歌詞が思い出せなくて鼻唄になりながら歌う。
足取り軽く、ホップステップジャンプ。

俺の名前は斐川尚之。大学卒業したてのフリーターだ。
今俺は、これからの生活に最も必要な、自宅に向かっている。
と、いっても一軒家は流石に無理なので、マンションを借りてもらった。
それでも田舎からでてきた若僧が、こんなに簡単に住居を持てること事態、この物件を探してくれた母に感謝しなければ!!!

「え～ぇと、この道の角を曲がって、真っ直ぐいけばいいんだな。」

☆☆☆★ｗｈｅｒｅ？

「で、デケェ！さすが東京、迫力が違うな！」
曲がり角の先には、空まで届くんじゃねぇかと思う程の高さを持つマンションが立っていた。
「スゲェなかあちゃん、ここを借りれるような金どこにあったんだよ。」
でも、今日からここが我が家になるのも悪くない。いやいい、バッチいい！
そんな想いを胸に秘め、顔がにやけたまま俺は新居へと足を急いだ。

急いだ。つもりだ。急いだつもりだ。なのに中々前へ進めない。
「…あっれぇ？」
どんなに足を早く動かしてもマンションの自動ドアには届かない。
いや、まず俺の足が地面に付いてない。
「なっんでだっ…！」

首元に違和感がある。
なんかまるで引っ張られて持ち上げられてるような感じだ。
それにそういや、背後にとてつもない気配がするようや気もする…。
俺は恐る恐る後ろを振り向いた。

「っぁぅ！！！！！！！！！！」

あまりの驚きに、つい変な叫び声をあげてしまった。

男だ。すっごいデカイ男だ。んでゴツイ。これでもかってぐらい筋肉があるんだよ。着ているTシャツやジーパンもピチピチ。二の腕が鉄パイプ4本分ぐらいあるし。女の子はきっと、こういう腕に抱かれたいと思うんだろうなぁ…

…じゃねぇよ！！！ちょちょちょちょちょとまて！なんで俺がこのゴツイMr．シュワ様に持ち上げられてんの！何？これが東京名物（カツアゲ）か！

？いやまて、カツアゲは俺の地元にもあったなぁ…じゃない！意味分かんねぇ！
と、とにかく逃げねば！！俺はまだこんなとこで死にたくない！

そうして無我夢中で暴れていると、シュワ様が口を開いた。

「お前、斐川美恵子さんの息子か？」

「あ？斐川美恵子って俺の母さんだけど、何で名前を知ってんだっ、てウワップ！？」

そういうや否や、シュワ様は１６５ｃｍの小柄な俺の体を軽々ともちあげ、米俵を運ぶような感じで歩き出した。何故かマンションの隣の道へ。

「おぃ！ちょとまて！まっ待てって！何処に連れてくんだよ！誘拐か？んなもんしてもウチの親は何にもしねぇぞ！おい！とりあえず落ち着く暇をくれ！」
必死に抵抗してみたが、シュワ様の前ではコンニャクでコンクリを壊そうとするようなものだった。
ちなみに、中学での握力は２２でした。弱。

「ついたぞ。」

…へ？何処によ？
まさか人身売買の取引場所か！？いやー！！まだ死にたくねぇ！
せめて最後に味噌煮込みうどんを食わせて…

ドサッ

「痛ぇ！！」

俺は地面に落とされた。久々の土、会いたかったよ。

辺りを見回してみた。
連れてこられた場所は、人がいそうな気配がしない寂しい空き地だった。
そして、そのど真ん中にこじんまりとした、よく刑事ドラマで見る古びたアパートがあった。
二回建ての赤屋根のアパート。近くにあるマンションとは月とスッポン、いや蟻だ。

「ここの２０２号室。今日からここが、お前の我が家だ。」

はい？

どうゆうこと？Ｄｏゆうこと？Ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ？

「どっ、どうゆうことだよ！俺の家は、すぐそこの【フローレンス板橋】っつうマンションじゃ…第一、母さんから来た地図にも書いてあるし…」

「見せてみろ。」

シュワ様は地図を見た。
しばらく見た。

そんで破いた。「えぇ！？おい、何するんだよ！」

「この地図は最近のやつだからここは乗ってない。美恵子さんも分からなかったんだろう。」

「実は最初は、確かにそこのマンションに住むはずだったんだ。けど色々手違いで契約やなんやら取り消されたみたいでな。だから美恵子さんは、しょうがなく古くからのゴルフ仲間である俺に、ここにおかせてやってくれと頼んだんだ。つい最近きまったから、連絡し忘れてたよ。」

なるほど。つまりは、俺の新生活はレオ〇レスのような美しい場所ではなく、こんな古びたアパートで送らなきゃいけないって訳か。

「なんでやねぇぇぇぇぇぇうぅぅぅん！！！！！！！！」

けど仕方ない。
どのみちマンションには入れないから、ここに住みたくないってったら間違いなく俺はホームレスの門をくぐるだろう。
ないよりはあったほうがマシだ。多分。

「どうやら腹をくくったみたいだな。お前の部屋に荷物があるから見てこい。」
「あと、いい忘れてたが俺は此処の管理人の志木だ。なにかあるなら１０１号室に来ればおれがいる。」

俺は力なく頷き、２０２号室に向かっていった。
マンションの時とは違い、両足に将来の不安という名の足枷があるようで、とってつもなく足取りが重い。

２０２号室に上がるまでの階段に、このアパートの看板がぶら下げてあった。

《冬月荘》

名前はとても素敵だった。名前は、とっても。

冬月荘。ここで俺の新生活が始まる。

そう思うと、長い溜め息が出てきた。

203 is RED and BULE ～They are demoni

窓から見える東京の空は曇りのち晴れ。

ところにより、暗闇

★★★★cloudy…

「はぁ……。」

さっきから溜め息がつきることなく出てくる。ダセェ。
この部屋は少しのダンボールと、俺の荷物。
それと目には見えない二酸化炭素で息苦しい。あぁダセェ。

俺の名前は斐川尚之。田舎から東京にやりたいことがあって、そのやりたいことってのは…はぁ、なんか今いう気分じゃないからまた今度。
ま、とにかく夢のようなスイートライフが約束されて……いたんだよなぁ。
本当は、隣の【超☆高☆層賃貸マンション】に住むはずだったのに、色々手違いがあったらしく、目の前にあるはずのオーシャンビュウは今や只のカ、ベ。
ちくしょう…ここ日当たり悪いんだよ。

母さんは悪くない。あんなに頑張って、俺のために家を探してくれたから。

俺は自分の部屋を見渡してみた。
だいたい広さは２ＬＤＫ…っていうのか、この狭さは？とりあえず、人がきたらまず『狭っ、こんなとこ住めるの？』というような狭さだな。
キッチン。これはそこそこ綺麗。コンロも二つありきちんと火がつ

くので料理の点では心配はないだろう。

問題は風呂場だ。

「なんだこれは…」

蛇口を捻ってみるが、水が少しづつしかでない。お湯も同様だ。
シャワーだって使えないぞ、これじゃあ。
それに湯船が狭い。俺はけっこう小柄な体つきだが、体育座りでギリギリという大きさ。
それと、びっしりと壁をはっている、かべ。じゃねぇや、カビ。これはドン引きした。

しまいには…

「うわっ、痛っ！！」

天井から壁の塗料の破片が崩れ落ちてきた。
剥き出しになった所に、何か紙が貼ってある。
不審に思い、はいで見ると文字が書いてあった。

《悪霊退散》

「…おふだですか？」

母さん、いくらなんでもこれは理不尽です。
俺はここでの暮らしに、改めて一抹の不安を覚えた。

その時、俺の隣の部屋でとてつもなく大きな怒鳴り声がした。

「くっそマジムカツク！！！テメェここで晒し首にすっぞ！！というかマジで死ね！！無理だったら俺が手伝う！！」

随分荒っぽい声の主は、若い男のようだ。にしてもかなり怒ってる…。

「黙れ備蓄倉庫の単細胞。お前が先に死ね。そして僕は後からゆっくり生きる。」

こっちの男は割と落ち着いた喋り方だ。口はさっきの男同様悪いけど。

「カァァ！！！マジウゼェ！！今日という今日は許さねぇぞ！！おい蒼馬、表でやがれっ！！決着つけるぞっ！！」
「まったくこれだから馬鹿って嫌いなんだよね。勝負は見えてるのにわざわざ挑んでそして、惨敗。いいかげんウザイんだけど、ねぇ紅平君。聞いてる？君のことだよ、小学校までお漏らししていた紅平くー…
「それは言うなぁぁぁぁぁ！！！！！」
ドスッンッッッ！！！！！！

これはヤバイんじゃないのか？〔火事と喧嘩は江戸の花〕とはあるが、実際おこっているものをほったらかしにするのは危険だろう。常識がある人間としては、止めに行かなければならない。野次馬根性がないこともないが。

俺は、どうやら外の空き地でおこっている喧嘩を止めに行くことにした。

「テッメェのその腐れ根性今日こそ俺が叩き潰してやるわぁ！！」
「うーわ、いい迷惑。」

その喧嘩はすさまじかった。喧嘩というよりも、死闘といった方が正しい。
片方の、怒鳴りちらしてる金髪の男。

右耳にピアスを空け、みた感じヤンキーといった感じだ。恐らくこいつが《紅平》だろう。
片やもう一方の男。
こいつは紅平とは違い、綺麗な黒髪。
学ランを着ているところを見ると、学生のようだ。
しかしこいつも、左耳にピアスをしている。
落ち着いた毒舌口調をしてるので、こいつが《蒼馬》らしい。

そしてこの二人が、お互いが互いにバットを持ち、本気で相手に殴りかかっている。
それ、鉄バットですよ、お二人さん…。
あまりの恐ろしさに、俺は止める気が一気に崩れ、そこで只々ことの成り行きをみていた。

数分後。蒼馬が勢い良く振り下ろした鉄バット（よく見るとエクスカリバーと書いてある）が、紅平の両アキレス健にクリーンヒット。
声にならない悲鳴が轟き、事は結末を向かえた。

「ほら、言ったでしょう。」

蒼馬の問いにも紅平は応えず、相変わらず悶絶している。

俺は堪らず紅平の元へ駆け寄ってしまった。

「おい！！大丈夫か！」

反応しない。とりあえず、管理人の所に行って手当てを。それかひとまず病院へ。

「その必要はないよ。」

んなこと言ったって……ってえぇ！？

「君さっきから思考が口から漏れてるよ。」

……あ、そう。

「おいアンタ。喧嘩にも限度ってもんがあるんじゃないのか。」

これは本音だ。いくら何でも可哀想すぎる。

「だからさっきから言っているでしょう。大丈夫だって。」

そう言って蒼馬は、紅平の体を顎でさした。

その通りのようだ。
等の紅平本人は、倒れていながらも地面に大量の死を書き殺害願望をアピールしている。

「ね、馬鹿は簡単には死なない。」
ははははっ。笑うことしか出来ない。

「…んで、何であんたら上がり込んでいるんだ。」
俺の部屋には今、当たり前のように茶を飲んでくつろいでいる蒼馬とここまで運ぶために蒼馬が気絶させたまま、ほったらかしの紅平がいる。
「ま、お隣のよしみってことで気にすしないで。気にするとハゲるよ。」

そうだった。すっかり忘れてた。
こいつも冬月荘の住人である。俺の右隣、２０３号室の部屋主だ。
「なぁ。あんたこの紅平って人とはどういう関係なんだ？」
「兄弟だよ。しかも双子。一卵性。」
に、似てねぇ！共通点の欠片もねぇ！
「あ、そうだ。僕らお互いの名前まだ知らないよね。隣人どおしの挨拶がてらに自己紹介といこうよ。こっちの話ばっかも嫌だし。」
それもそうだよな。一応お隣さんだし、仲良くしといた方がいいよなぁ。
まず、この人たち怒らせるとやっかいそう…。
「えっと、俺の名前は斐川尚之…です。昨日此処に越してきま…した。」
な、なんか俺ダセェ…？今日はダセェＤａｙだ。
「コンパの自己紹介みたい。てか敬語使うなよ。」
「僕は蒼馬。七式蒼馬。で、こっちで寝ている阿呆は七式紅平。両方高３だからね、これでも。んじゃ。」
そういうと、蒼馬は紅平の首ねっこを掴んで引きずりながら自分の部屋に帰っていった。
「ちょ、ちょっと待てよオイ！！」
あぁ、今の俺ちょいキムタク気分。てか
さりげなくお菓子悔い散らかしてそのままかっ！？いくら隣人だか

らって年下相手になめられてたまるかっ！

「だから待てっ

「斐川さん。」

ハイ？

ドアの前に立ち、出ようとした動作を止め、蒼馬がふりかえる。ゆっっっくり。

「仲良くしましょうね。こ・れ・か・ら・も。ね？」

そういう蒼馬の眼は笑っておらず、どこから出したか右手にあの時の鉄バットを持っていた。

「……ハイ。」

隣でドアの閉まる音がした。

母さん。いくらなんでもこんなのは嫌です。殺生です。殺生。

この時見た月は。綺麗な満月のはずなのに、霞んで、にじんでいた。

不安だ。不安でしょうがない…。

203 is RED and BULE ～They are demoni

読んでくださってありがとうございました！！！！

201 is BLACK…～I want money or love～

時は金なり

って誰かいってたな。

☆★☆★☆money!?

「んだとぉ!!!今の言葉もう一回言ってみやがれぇ!!!!」

「だから、目玉焼きにマヨネーズかけるなんて邪道だって言ってるんだよ。朝っぱらから気持悪いんだよね、只でさえお前の顔で吐気がするってゆうのに…そのキモイ顔に。」

「箸おけぇ！！んでもって表でろやぁ！！！」

…はぁ。また始まったよ。

そう思いながら、俺は朝御飯のたくあんを口にはこんだ。

俺の名前は斐川尚之。

田舎から東京に移り住んできた、現在無職なフリーターである。

最初はもっといい物件に住むつもりだったが、色々あって此処、オンボロアパート《冬月荘》に住んでいる。

只でさえ此処に住むことになってへこんでいるのに、此処の隣人がまた……

（ドンガラガッシャァァァァン！！！）

で、その隣人というのが今の騒音の原因である少年二人組である。

二人の名前は七式紅平、七式蒼馬。

ちなみに怒鳴っている方が紅平で毒舌はいてるのが蒼馬。

俺が初めてこのアパートに来て初めて話した、２０３号室の双子の

兄弟だ。（ぼっち似てないけど）
初めて会った時もそうだったが、こいつらは毎度毎度喧嘩している。
むしろ仲良くしている所など見たこともない。

（バッキィィィ）

「…今日は終わるの早いな。」
そして大体この喧嘩の勝者は…

「今度僕にたてついたら、一生をベッドで過ごすような体にしてやるからね。ま、この言葉はテレビの受け売りだけど。」

毒舌少年、蒼馬だったりする。

そんなこんなで毎日を過ごしていた俺だが、ある日滅茶苦茶重要な事に気付いた。

「ヤッベェ！！！！２０３号室以外のトコに挨拶回り行ってねぇ！！！！」
そうなのだ。
七式兄弟のインパクトのでかさと、管理人志木さんの胸板の厚さに、他の住人の事を忘れていたのだ。

ここ、冬月荘は全部で７つ部屋がある。
二階建てになっており、一階が右から１０３、１０２、そして何故か１９１号室とある。
二階は右から七式兄弟の２０３号室、２０２の俺の部屋、２０１号室となっている。
とりあえず、２０１号室から行ってみよう。普通の人であることを期待して…。

《ピンポーン》
少し緊張と世にいうツマラナイモノ、もとい菓子の詰め合わせを持ち部屋の前に立つ。
流石に来てから４日後の挨拶は遅いかな…。
《ピンポーン》

…いねぇのかなー。返事も無いし。
俺はひとまず部屋に帰ることにした。

俺は自分の部屋の扉を開ける。

……ちょと待て。待て待て待て待て。
ここは俺の部屋だよな。うん、２０２号室だ。

じゃあ、俺の目の前にいる全身タイツは…誰？俺の財布の中身を探ったポーズのままこっちを見ている全身黒タイツのコイツは誰？
フーイズディス？

えーー…と。

「あの…もしか、しなくてもさ。あんた、泥棒？」

「…いやっは、そう…みたいですね！」

「そっかぁ、お前泥棒かぁ～」
「そうなんですょ～」

「「アハハハハハハ……」」

……泥棒！？！？！？！？

気付いたときには、黒タイツは俺の脇をすり抜けドアの外に出ようとしていた。

「させるかぁ！！！！」

タイツの右手には諭吉が５人握られている。
それは俺の全財産だ、今ここで易々と盗られてはこの先の生活どうする！？
とっさに俺は、タイツに全身タックルし、外の通路へ吹っ飛ばした。

「ぐっはぁ！！！！」
情けない声を出し地面に身を投げ出すタイツ。
俺以上に細く、その風貌はモジ三君を思い出させてくれる。

「このやろっ、返せ俺の全財産！！！」

タイツに掴みかかろうとした。が、タイツはまるで蛇のように俺の手をすり抜け
２０１号室に入っていった。

て、何で？

２０１に鍵がかかった。
「るっせぇな…。」

大欠伸をしながら２０３から金髪が顔をだす。
七式紅平だ。

「…っおい！！紅平！！今っ…全身タイツの泥棒が…２０１号室にっ…」
「あぁ、吉岡のおっさんだろ。あいつまた何か盗ったのかよ。」

また…？

「またって、今までもか？」
「あいつは泥棒常習犯なんだよ。って言っても下手くそだし、よく見付かるし、ここから逃げねぇから冬月荘のやつらはなんも警戒してねぇんだよ。」

警戒って…。通報しろよ、通報。１１０押せばいいだろが…。

「で、アンタは何盗られたんだよ。」
「え！？ぇ、あー…諭吉さん５人。」
「５万だな、ったく面倒くせぇ…」

そう言うと、紅平は２０１号室の扉前に立ち、おもっっいきりドア

を蹴りあげた。

「おい！！！吉岡のオヤジ！！！！盗った５万さっさと返しやがれぇ！！！！！」

…コノ人借金取リサンデスカー？怖イデスョー…。

「そ、そそそんなことといったて私も生活が

「んなこと知るか！！そんなとこひきこもるより、まっとうな仕事掴むためにハローワーク行けや！！！」

うっわぁ…その言葉俺の心にも響いたよ…むしろ痛い…それより君と居たい…。

何いってんだ…俺。

いつの間にか、借金取り…ゴホッいやいや交渉人・七式紅平君が５万を取り返してくれたらしく、俺の目の前には諭吉を握る交渉人が。

「ほらよ。あと家にはちゃんと鍵かけとけ。」

そういって、俺に諭吉を返し面倒くせぇと愚痴を溢しながら２０３号室に帰っていった。

「あ、ありがと…」

お礼をいうまもない。

いい奴…なのかな。

「ぐすっ…ぐすん。」

泣いてるよ、吉岡さん…。そういや、この人も俺と一緒で生活苦しいんだよな。

俺は吉岡さんの新聞うけに、１万円を入れておいた。

部屋に帰り、俺はすぐさま寝転がった。

「ここの人って。変な人多いけど、案外いい人かもしれない。」

そんなことを思う、今日この頃。

今日は月がよく見える。

…ー次の日。

「…ん。」

カタカタという音で目が覚める。

目の前には昨日の見慣れた黒タイツ。

「またこのパターンか……。」

母さん。戸締まりはきちんとしたほうがいいみたいです。

201 is BLACK…～I want money or love～

乱筆乱文なのに、ここまで読んでくださって有難うございました！

！！感謝感激飴よ降れ☆

103 is white ～love is put from that

愛は凄い。
ホントに。

◎◎◎◎◎love is where？

シィン……。

キィ。

『……。』

キョロキョロ。

『……よし。』
「よしじゃねぇよ！」

部屋の明かりがつく。
カーテンも全開にされ、朝の光が一気に流れ込んできた。

その先には、パジャマ姿で仁王立ちしている青年と、戸口に向かってダッシュで逃げようとしている黒タイツが。

「おいコラ待てやぁ！！！！」

そういって青年は、見事な飛び蹴りをくらわせた。蝶のように舞、蜂のように刺す。

『ぐべぼっ！！！……み、見逃してください、私には病気の女房と7人の双子が……』

そんな嘘はもちろん信じてもらえず、青年に捕まる黒タイツ。嗚呼、惨め。

「んな見えすいた嘘誰がかかるかぁ！！お前は第一独身真っ只中だろがぁ！！！」

『いぎゃあああ！！！！！』

哀れ黒タイツ。

「…ったく、あの人もいつになったら懲りるんだ？」

あの人というのは、もちろん黒タイツのこと。

名前は吉岡さんというのだが、どぉーも泥棒癖があるらしく。

毎度毎度こうやって俺の部屋に忍び込んでる。

しかも必ず朝。泥棒業って夜するんじゃないのか？

ちなみに俺の名前は斐川尚之。

東京に上京し、いろいろあってこのオンボロアパート《冬月荘》の２０２号室に住んでいる。

初めはこの華の都東京に希望を抱いていた。

…そうさっ！！！俺の胸には夢と希望で満ち溢れていたさ！！！なのにここの住人ときたらシュワちゃんあり泥棒あり鬼と悪魔があり…

「誰が何だって？」
「のぉわっ！！！？そ、蒼馬…。」
俺の背後にいつの間にか立っていた、黒髪の美少年。
こいつこそが、《悪魔》もとい俺の隣人の七式蒼馬だ。

こいつは見た目は優等生で、どこか物欝気な雰囲気をかもしだしてる。だが、

「てか蒼馬君。ここ俺の部屋なんだけど…何で普通に菓子食ってんだよ。それに菓子だって俺のだし、しかも」
ドゴゥッッ！！！
壁に刺さる鉄パイプ。
「文句、ある？ミジンコレベルの考え方しかないホニュウ類。」
「……。」
ゆっくり首を横に振る。
それを見て、ご満悦に黒い笑みを浮かべる蒼馬。

この通り、物凄い俺さま気質で他人にも普通に鉄パイプを投げるような高校生君なんです。
人は見た目によりません。

そしてこいつの兄弟で、もう一人。
「くおらぁぁぁ！！！どぉぉこいきやがったあのバカ馬ぁぁ！！！」
……来たよ。金髪の《鬼》が。
バッコォォン！！！

蹴り倒された、部屋のドア。
あぁ、俺の部屋なのに……。
「おい蒼馬！！てっめぇ俺の靴にガビョウ入れやがったろ！！」
「おいおい言い掛かりはよしてくれ。いったい何を根拠に俺がそんなアホ臭いことを。」
「わざわざ部屋の中まで他人が入るかぁぁ！！！！！」

カーンッ。
ドンガラガッシャン！！！
ラウンド・１。
今怒鳴りながらドアを破壊したこの金髪男。こいつこそが、《鬼》である七式紅平だ。
風貌からして不良、言動からみても不良、喧嘩っ早い所を含めて不良。不良オブ不良な高校生だ。
しかも、全てが正反対な七式蒼馬と一卵性の双子らしいのだ。ミステリー。
んで、こいつら仲が悪い。

「死にさらせぇぃ！！」
ガキィン！！！
「ほら、紅平こそ神からお迎えが来てるよ。さぁ、天国なんて滅多に行けるものじゃないし、一度くらい行ってみなって。そして二度と戻ってくるな。」
バッキィィ！！！！！

ま、こんな風に毎朝必ず外でＫ－１並の死闘を繰り広げている。
しかし神の助け、この滅茶苦茶な住人の中で唯一まともっぽい人が出てきた。

「斐川さん？」

「はっ、はいっ！」
「カレー余ったので、よろしかったら差上げようと思ったのですが……ドア、どうしたんです？」
「ハハ、七式兄弟にやられまして……」

そう、この白いスカートに身を包んだけなげな通い妻（違）こそ、１０３号室の住人、まともなお方、綾部ナコさんだ。
「んでも、いっつも悪いですね。ナコさんから貰ってばっかで。」
「いいんですよ。どうせ私も一人暮らしで、食べきれなくて困っていたんです。逆にこちらの方が助かっていますよ。」
ナコさんは、近くの専門学校に通っている学生さんらしい。
吉岡さん事件の後、挨拶回りに行った時に意気投合し今では、夕飯を貰う仲にまで発展している。

そういえば。ナコさんに会ってから、残りの部屋にいってない。
……ま、いっか☆

ｌＡＭ１１：００―
「ん……。」

寒い。
今の季節は春、ぐらいだと思うのだが。
風が強く吹いている、これのせいか……。

俺はまだ、重いまぶたを開けることが出来なかった。

「（確か、あの後ナコさんに部屋に来ないかって言われて。部屋で一緒に昼飯食べて、それで……）」

それで、どうしたんだっけ？

どうやらうっかり寝てしまったみたいだが、酒とか飲んでない筈なのにどうして……。
てか、マジ寒い。
なんでだ？さっきから部屋の温度が下がる一方のような気がする。
風だけでこんなに寒くなるはずないのに……。
俺は、起きて部屋がどうなってるか確かめようとした。
が、まぶたが開かない。
体も動かないのだ。
何かに縛られてるという感覚はない。
体がゆうことをきかないのだ。まるで睡眠薬を飲んだ時のような気だるさで……

「（睡眠薬、まさかな。）」

俺は有り得ぬだろう予感を立ちきった。
いくらなんでも、あの人がそんなことするわけないな。

そんなことより、この部屋から出ねば。
考えてる間にも、部屋の温度は下がっていく。

「（くっそ…体が…）」

ヤバイ。
ホントに意識が遠のいてきた。
俺は、勢いつけて体を起こしてみた。
（ガバッッ！！）
「……なんだここ？」
俺のいる場所は一応部屋だった。
だが、電気も付いてない、窓も閉めきってある。

それに何故か、クーラーがついている。さっきの風はこれから出てた物のようだ。
しかも設定温度が１９度。……起きてなかったら死んでたな。
ん？でも何で俺はこんな部屋に？ナコさんの部屋にいたんじゃ？

「また、失敗した……」

扉の方から聞き慣れた声。
「な、ナコさん。」
俺はナコさんのもとへ行こうとした。
けれど、ナコさんの様子がおかしい。部屋に入ったまま、うつ向いたままだ。

「ナコさん？ナーコーさーん？」

いくら呼び掛けても返答がない。
そういえば、【また、失敗した】ってどうゆう……

「ンガァァァァァァァァ！！！！！！！！！」

いきなり、いきなりだ。
悪魔が地の果てから復活したような奇声、いや殺声を発し、彼女は台所の出刃包丁を持って俺に襲いかかってきた。
「（いぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）」
声にならぬ悲鳴を上げながら、向かってきた包丁をしっかり両手で挟んでいた。人間やればなんでも出来る。

「ちょっ…ちょっと待て！！待て待てストップ！！！たんま！！どうしたんですかナコさん！！」「どうもしてないわ。
「いや、してる！」

「斐川さん、私、斐川さんのことずっと前から好きだったんです。」
ハイ？今、好きっていったんだよな。
…ダメだ！！！こんなバイオレンスな状況じゃ素直に喜べない！！
むしろ逆に怖いぞ！！なんかありそうな予感が！！
「斐川さん。だから、あの、私と……心中してください！」
予感的中ぅぅぅ！！意味分からん！そこ普通付き合って下さいだろう！
そうこうしている内に、包丁は俺の目の前１ｃｍまで距離を縮める。
「ま、待て！落ち着け！」
「落ち着いてます
「なら包丁置け！！！今すぐ置け！！！」
渋々包丁を置き、ナコさんはペタリと座り込んだ。すると、いきなり泣き出した。今さっきの鬼の様な形相は、そこにはなかった。
「何でよぅ…グスッ…何で死んでくれないのよぅ…心中こそ究極の愛の形じゃないぃ…」
「ナコさん……それはどうかと。まず告ってすぐに、心中てのは愛なんてないでしょう。」
「私はあるわ！」
「俺は無いです。」
心中が究極の愛。
いつの時代の考えだよそれ……。でも、また失敗てことは前科ありってことか。幸い死者も出てなかった。
て。俺が最初の犠牲者になってたかもしんなかったな。

「……グスッ、じゃあ、」
「じゃあ？」
「じゃあ、斐川さんが私を本気で愛してくれたら、死んでくれるんですよね！」
「え？」

ヤバイ。彼女の瞳に輝きが戻ってきている。瞳の中には、心中の二文字。

「わかりました！私、斐川さんが私のことを愛するように頑張ります！そして、絶対心中させます！待っててください！じゃあ！」

（バタン）

やっぱり、こういう展開か。
待っててください。告白がこんなに恐怖に感じたことは生まれて初めてだ。

俺、斐川尚之の今後の課題。
綾部ナコに惚れないこと。

「そういえば、ナコさん出てったけどここは誰の部屋なんだ？」

ー２０２　斐川ー

…で、電気代がっ！！！

103 is white ～love is put from that

今回は愛と死をもとに書いてみました。無駄に長くなってしまいましたが。
ここまで読んでくださって、ありがとうございます！m（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1208a/

螺子巻パラドックス

2010年11月12日00時17分発行